旭川医科大学研究フォーラム 13　：127 ～ 130，2012

学界の動向

日本ルーラルナーシング学会　第６回学術大会を終えて

北　村　久美子*

2011 年 10 月 15 日（土）および 16 日（日）の２日間、日本ルーラルナーシング学会第６回学術集会を旭川で開催させていただきました。参加者は、遠く沖縄はじめ九州、四国、と全国各地から両日で 124 名のご参加を得て盛会のうちに無事終えることができました。これもひとえにご支援ご協力をいただきました皆様のお陰と厚くお礼申し上げますとともに、結果について簡単にご報告させていただきます。

本学会は、2005 年３月に設立された新しい学会です。学会の英語名は、Japan Society of Rural and Remote Area Nursing であり、へき地における看護の研究を推進し日本におけるへき地看護学を確立・発展させへき地の保健医療福祉の向上に寄与することを目的としています。学会設立発起人代表である本学会の理事長は野口美和子教授で学会設立の理由は、次のように示されています（資料）。学会本部事務局は自治医科大学看護学部内にあります。

第６回学術集会の取り組みと結果について

第６回学術集会は、初めて日本遠隔医療学会との並列開催となりました。その経緯についてですが、第３回学術集会総会で理事ならびに評議員に選出されてわかったことですが、これからの学会開催予定地は、第４回は群馬、第５回は長崎、第６回は長野ということでした。しかし、長野開催の当番校から都合により開催時期延期の申し出があり、その後の理事会で協議され第６回学術集会は旭川が開催予定地となり担当させていただくことになりました。このことが決定したのは、2009 年８月の第４回学術集会総会でした。旭川での開催につき思い巡らせていたところ、2010 年１月７日学会本部事務局渉外担当の永井優子教授から「本学会は、学会開設時から日本遠隔医療学会と交流が続いており関連団体である日本遠隔医療学会会議に出席した際に、旭川での開催は日本遠隔医療学会との合同ではいかがであろうか、との提案がありましたので是非検討して下さい」という連絡を受けました。ただちに、日本遠隔医療学会学術集会大会長となられる吉田晃敏学長に事情をご説明しご相談申し上げご快諾いただいた時は、内心ほっと致しました。本部事務局には「日本遠隔医療学会は 10 月 14 日（金）、15 日（土）開催であり２日目の 15 日（土）を並列開催に」と報

*旭川医科大学　名誉教授

日本ルーラルナーシング学会設立趣意書
（Japan Society of Rural and Remote Area Nursing）

保健医療の面から見た遠隔地（過疎地域、豪雪地帯、山村、離島等、以下へき地）における医療提供体制の確保は、わが国の医療政策における重要課題です。これまでもへき地保健医療対策の推進、医療計画の導入等により、各都道府県等における計画的な取り組みが求められ、国としてもこれを支援してきています。それにもかかわらず医療の地域偏在は依然として大きな問題です。へき地においては、医師の確保が最優先課題とされますが、保健医療福祉資源が乏しい地域だからこそ、健康の保持増進や住民の主体的な保健活動への支援やチーム医療が重要になります。平成16年2月に地域医療に関する関係省庁連絡会議により出された「へき地を含む地域における医師確保等の推進について」においても、医療水準の向上のために、医師はもちろんのこと、看護師への生涯教育の提供の重要性が述べられています。

へき地で働く看護職の調査について、20数年以上前に駐在保健婦の活動が数件ある程度でした。最近では、看護系大学の増加に伴い、設置されている地域の特徴にあわせて、あるいは看護の行き届いていない部分にも目を向けた結果として、県レベルでへき地における看護活動の質の向上や人材育成に焦点を当てている大学もみられるようになりました。

自治医科大学看護学部では、開設と同時に、へき地に勤務する看護職を対象に調査（平成14～15年度）を行いました。その調査結果から、へき地診療所を利用している患者の中心年代は65歳以上であり、高齢者がその地域に住み続けるために、自立した生活をいかに延長できるか、そのための高齢者に対する看護活動をどう展開していくかということが、へき地における大きな課題であることが明らかになりました。また、全国の傾向と同様、生活習慣病や慢性疾患が多くみられ、そこには地域に特有な食文化や食糧保存の習慣等が関連している場合もあり、その地域の生活状況を考慮しながら、生活習慣病の予防から自己管理まで支援していく看護活動が必要であると考えられました。さらには、地理的状況から二次医療機関、後方支援病院まで遠く、救急時の対応、受診・疾病発見の遅れ、通院負担等の問題、島や豪雪地帯等閉ざされた生活が関連していると考えられる精神面の問題、社会資源の活用や社会資源利用に関する住民の意識の特性にも看護が対応していく必要があります。一方、へき地に勤務する看護職は、診療の補助以外に救急時・医師不在時の対応、住民に身近な存在としての相談的役割、関係者・機関と連携しケアチームの一員としての在宅ケアの実施、社会資源利用に関わる援助、地域住民のつながりを把握しそれを活かした看護活動等幅広い活動を実施している状況が明らかになりました。しかし、研修・研鑽の機会が少なく新しい情報が入手しにくいこと、相談できるバックアップ機関やサポート者がいないというサポート体制の不足も明らかになり、へき地に勤務する看護職の研修・サポート体制の構築が課題であると考えました。

このようにへき地に勤務する看護職には、プライマリ・ケアの担い手として、小児から高齢者まで、また慢性期から救命救急、終末期までとあらゆる発達段階、あらゆる健康レベル発達障害、あらゆる健康レベルの対象への看護が求められます。幅広い総合的な能力を求められるへき地看護活動のための人材育成、へき地に勤務する看護職のための生涯害を通じた研修・サポート体制が必要であり、このことが地域ケアの水準の向上に資すると考えます。

そこで、私たちは、へき地、並びに、へき地を含む地域の中核病院・保健所に勤務する看護職やルーラルナーシングに関心を寄せている教育研究にご意見を伺い、その結果、研究活動を活発にし、その成果をへき地看護の人材育成やへき地における看護実践者の生涯学習に還元していくことが必要との結論に達しました。そして、日本ルーラルナーシング学会の設立を提案することとなりました。日本ルーラルナーシング学会の目的は、研究の充実のを図り、活発で現実的な意見交換を行い、海外教育研究者との交流も図りつつ、その成果をルーラルナーシングに携わる教育研究者・実践者と共有していくことであります。そして、へき地における看護について現在個々になされている研究から得られる知見の統合・体系化を図り、日本におけるルーラルナーシングを確立することをめざします。

資料1

告させていただき、10月15日（土）のみ2学会並列開催、10月16日（日）はエクスカーションの企画となりました。本学術集会のテーマは、遠隔地であるへき地・島嶼などにおける医療のあり方を考えると共にそこで暮らす人々の生きる希望、生きる力に寄り添える看護の役割を確認し合いその方向性を展望する機会になることを期待したいと考え、学会のテーマを「へき地、島嶼看護を人々の生きる希望、生きる力に」とさせていただきました。また、特に、2011年3月11日の東日本大震災により被災された多くの皆様のことを思い浮かべ胸が痛むとともに、私たち看護職の仕事で人々の生きる希望、生きる力につながる何かをしなければの気持ちが沸いてきました。

1日目：2学会並列開催、10月15日（土）、
会場　旭川グランドホテル

前日10月14日（金）に行われた日本遠隔医療学会学術大会開会式には、日本ルーラルナーシング学会野口美和子会長からもご挨拶をさせていただき、当日15日（土）の本学会学術集会の開会式には、日本遠隔医療学会原量宏会長ならびに日本遠隔医療学会学術大会吉田晃敏大会長に来賓のご挨拶をいただきました。双方の学会参加者が両学術集会に参加できるようにプログラムを工夫し、午前の日程は、日本遠隔医療学会大会長講演とシンポジュウムの参加が可能となるように、午後の日程は、本学術集会の一般演題33題（口演13題、示説20題）の発表が行われ、参加者は89名でした。

口演は第Ⅰ群「へき地で暮らす人々の健康を守る活動（4題）」、第Ⅱ群「へき地の特性を活かした看護活動（4題）」、第Ⅲ群「へき地における地域ケアシステムとネットワークづくりのための活動（5題）」、示説は第1群「へき地で暮らす人々の健康を守る活動（7題）」、第Ⅱ群「看護教育・人材育成のための活動（5

題)」、第Ⅲ群「へき地における地域ケアシステムとネットワークづくりのための活動（８題)」でした。小離島や限界集落、中山間地域、へき地診療所などにおける看護の役割、遠隔医療システムを用いた退院後支援、島嶼であるが故の関係機関との連携協働による活動、看護師派遣制度、島嶼看護教育など広範囲の発表があり、看護がへき地・島嶼における人々の生きる希望・生きる力に、と強く願っている看護観が伝わり熱のこもった活発な討論が行われました。しかし、短い時間運営のため発表者ならびに参加者の皆様の意を尽くした満足のゆく発表と討論には至らなかったのではと大変心苦しく思いました。皆様に、発行予定の日本ルーラルナーシング学会誌の第６回学術集会報告に、ぜひ論文のご投稿下さるよう記載させていただいたところです。アンケートによる参加者の感想として「様々な問題意識からのテーマで大変興味深かった」「現場の方の発表がとても新鮮で改めて考えさせられることばかりであった」「口演発表と示説発表の時間を重ならないように進行されていたので落ち着いて聞くことができた」などがあり、また、初めて日本遠隔医療学会に参加できたことについては、「双方の学会と関連が深く協働の必要性など多くの学びと刺激を得ることができた」「今後も並列開催を望む」などの感想が寄せられ、大変好評で安堵の胸を撫で下ろしました。

尚、同日の一般演題発表に入る前に 2011 年度日本ルーラルナーシング学会総会が開かれました。第８回学術集会は石川県での開催が承認され、第７回学術集会は長野県看護大学にて 2012 年９月 15 日、16 日に開催されることが報告されました。また、学術集会前日 10 月 14 日（金）午後に理事会、評議員会が旭川医科大学看護学科棟を会場に開催されました。その夜は、日本遠隔医療学会の懇親会が予定されており吉田晃敏学術大会長のご厚意により懇親会のご参加のお誘いをいただき役員全員 13 名が出席させていただきました。懇親会の会場は、旭川旭山動物園で動物たちの夜の勇姿、行動を静かにそっと見せていただきました。両学会の会員同士が和やかな雰囲気の中で北海道の新鮮な味覚を堪能しながら交流を深めることができ、大変有意義な時間を共有できましたことに役員一同、大変満足されたようでした。

第２日目：エクスカーション、10 月 16 日（日）

本学会では第１回学術集会より地域の歴史や文化、人々の暮らしなど地域の実情を知り地域の特徴にあわせた看護活動に触れていただくためエクスカーションが企画されています。そこで、今回も「北海道・道北の歴史、文化、自然を探索する旅」と称してプログラムを企画しました。35 名の参加者がありバスで広い上川盆地の秋の紅葉を見ながら回りました。

川村カ子トアイヌ記念館

上川地方を代表するアイヌの旧家として知られる川村家第８代川村カ子トが生前アイヌ民族文化の正しい伝承を目的として大正５年に作った日本最古で唯一の私立アイヌ資料館を訪ねました。秋の刈り取り後の草藁の香がする山里の一軒家を思わせる佇まいでした。

参加者は、記念館に関わる 80 歳代の女性から幼少の頃から現在までの鮮明な生活体験談に深刻な面持ちで耳を傾け、しばし、北海道の過去の世界にタイムスリップしたかのようにいろいろ尋ね深い関心を寄せていました。

三浦綾子記念館

旭川出身の作家で道北にちなんだ多くの作品を生み出し、外国樹種見本林の静かな場所にある文学館に行きました。ご主人の三浦光世様のお迎えを受け貴重な文学資料のご説明をお聞きする機会に恵まれました。

東川町にて地域看護活動のミィーテング

東川町子育て支援センター長・幼児センター園長伊藤和代保健師（教育委員会所属）に東川町における先駆的な地域母子保健の実践報告をしていただきました。東川町の歴史や文化に基づき地域ニーズをキャッチしながら、親・子どもの視点を重視したまちづくりと子育て支援、養育者支援、関係機関との連携による子どもの成長を縦につなぐ途切れない支援などを事業化してきた過程について、また、過去の先輩たちの保健師活動の取り組みが礎となって現在に至っていることなどの紹介がありました。地域に根付いた実践活動に、参加者から活動方法に関する多くの質問が出され、昼食をとりながらも熱心な交流が続きお陰で実りあるミィーテイングになりました。その後、旭山動物園に寄り旭川空港、駅前、旭川グランドホテルまでのバス移動で一日が終わりました。

最後に、医療に恵まれないといわれている遠隔地においても、そこで暮らしている人々の生活、健康に責任をもち安心して生活できるように実践者と研究者が幅広い情報交換を行い、へき地における看護がより発展することを期待する次第です。本学術集会の初めての並列開催を盛会裡に終了できましたことは、日本遠隔医療学会学術大会吉田晃敏大会長のご協力・ご支援、そして学会参加者の皆さまのご協力のお陰と心より感謝申し上げます。ご支援を賜りました大学関係者はじめ本部事務局、旭川グランドホテルの皆様に厚くお礼申し上げます。